

聖書：マタイ 6：33

説教題：第一に求めるもの

日時：2018年9月30日（朝拝）

今日の御言葉は聖書の中でも最も有名なみことば、また私たちにチャレンジを与えるみことばだと思います。「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」これは何を言っているのでしょうか。「まず」とは「他のものに先立って」ということです。これは神に関することを一番にきなさいということでしょうか。他のすべてのことは二次、三次にきなさいということでしょうか。まさにそういうことです。自分のことを心配して毎日をやり過ごすのではなく、神をあなたの第一の関心事ときなさい。神に関することを優先順位の第一位にきなさい。これは生まれながらの私たちの考えとは全く反対です。私たちはまず自分のことを考えます。そしてそれがある程度解決して余裕ができたなら神のことを！と考えやすい。そして今は色々と取り組まなくてはならないことが自分の生活にあるから、神のことに心を向けて従うことはできない。それは今のことが片付いてから！などと考えやすい。しかしイエス様いわく、その考え方が間違っている。まず神の国と神の義を求めよ！というのです。ここにキリスト教の考え方は神中心であることがはっきり示されています。

これは聖書全体に見られることです。前に見た主の祈りもそうでした。6章9節からの部分に記されていましたが、私たちがまず祈るべき事柄は何だったでしょう。それは神の栄光に関する祈りでした。「御名が聖なるものとされますように」「御国が来ますように」「みこころが天で行われるように、地でも行われますように」。これらの祈りの後で初めて私たち人間の必要に関する祈りが来ました。あるいは旧約聖書の十戒にもこの原則が見られます。出エジプト記 20 章に記されていますが、最初に来ているのは「神を愛せよ」に関する戒めです。第1戒から第4戒がそうです。その後で「隣人愛」に関する第5戒から第10戒までの戒めが来ます。このような聖書の原則を示されると私たちは思わずうめいてしまいます。いつでも自分に関することを先に持って来たい私たちにとって歓迎すべき教えには思われぬのです。何か面白くない！という反発心さえ感じてしまう。そしてこんなことも思ってしまうがちです。まず神のことを先にせよ！と神が私たちに要求するなんて、神こそ自己中心的ではないか。私たちが自分を後回しにして、まず神のことに献身すべきという教えはどこかおかしくないか。それでは

自分がなくなってしまうのではないか。これは危険な教えではないか。しかしもちろんそうではないのです。

前回私たちは心配してはならないというイエス様の教えを見ました。なぜ私たちは心配する必要がないかと言えば、それは天の父が私たちを心にかけて、養ってくださるからでした。私たち一人一人の人生に計画を持ち、いのちとからだを与えてくださった神は、ご自身の目的を達成するまで私たちの人生を守ってくださる。そのためには必要な食べものを与え、着物も与えてくださる。その例として空の鳥、野の花を見なさい！と言われました。神は鳥や花を慈しみ、あのように養い、着飾らせておられる。とするならましてやあなたがたの天の父はあなたがたにはそのように、いやそれ以上にしてくださいるはずではないかと。そこで教えられたことは私はたまたまこの地上に生まれ、自分の力で何とか生きているような者ではないということです。何と神が私を生かし、今日も上から守り、支え、導いてくださっている。私の人生は神の大きな全能の御手の中にある。だから心配無用であると言われました。であるなら私たちは何に心を向けて歩めば良いのでしょうか。それが神の国と神の義を第一に求めるということです。まず先に神の驚くべき恵みがあって、それを知り、感謝する私たちが、今や自分に関する心配から解放された者として、神と神に関することを第一に求めるということなのです。

これは先に触れた主の祈りや十戒についても同じです。主の祈りでも先に神の栄光に関する祈りが来ることを述べましたが、その前に「天にいます私たちの父よ」という呼びかけがありました。私たちが神に向かって「父よ！」と呼びかけられるのは、神が送ってくださったイエス・キリストの十字架を通して、その方を信じる私たちの罪が赦され、聖められたからです。その神の救いに心から感謝して、私たちがまず祈るのが神の栄光に関することでした。また十戒も出エジプト記 20 章 2 節にあるように、すべての戒めに先だって「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、主である」という序言がありました。すなわちイスラエルをエジプトの奴隷状態から救い出してくださいした神の恵みのみわざが示されています。この恵みの神を仰ぐからこそ、心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして神を愛するということに関する戒めが先に来るのです。ですから今日の御言葉も神の横暴な要求ではありません。私たちは神への感謝と信頼を、この御言葉に従うことによって現わすのです。他のことに心を奪われ、心配しながら生活するのではなく、まず第一に神を求める歩みをするこ

て、私たちが本当に神に信頼していることが示されるのです。

では私たちが第一に求めるべき「神の国」と「神の義」とは何でしょうか。まず神の国とは、主の祈りの2番目の祈りで見ましたように、神のご支配のことです。聖書によると人間は罪を犯してサタンの支配下にあるようになったと言われていました。当然その支配のもとでは私たちに幸いはありません。そんな私たちに神は御子イエスを遣わし、その方の十字架の犠牲を通して、この方を信じる者の罪を赦し、受け入れ、ご自身の恵みのご支配に入れてくださいます。これが福音です。私たちはこのイエス・キリストを信じて神の国に入れられる者となりました。しかし私たちはまだまだこの神のご支配に完全に従う者たちとはなっていません。ですから神の国を求めるとは、まず自分自身が神とその御心に益々従う者となることです。そのためには聖書を通して神の御心は何かを注意深く知り、学ぶことが欠かせません。そしてその御心に沿って従う生活を今ここでささげて行くことです。やがては消え去り、さばかれるこの世の価値観に立って生きるのではなく、いつまでも続く神の国の価値観に立って生きることです。そして神の国を求めるとは、自分が服するばかりでなく、神のご支配が世界に益々広がることを求めることでもあります。やがて神の国は目に見える形で現れ、最終的に完成します。そのゴールを見つめて、今、自分に与えられている仕事や働きを通して神の国がいよいよ現れるようにすること、また周りの人々に伝道すること、家族・友人・職場の人々・世界の反対側にいる人々のために祈り、できる働きをすること、教会の宣教の働きに加わることなどがそうでしょう。

もう一つの「神の義」とは何でしょう。これは神の国と別ではなくセットの事柄です。神の国に生きる人は本当の意味での義の生活をする人でなければならないことが、この山上の説教で言われて来ました。5章20節：「あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません」 イエス様はそう述べて、天の御国にふさわしい義の生活とはどういう生活かをこれまで語って来られました。それは当時、人々から宗教的と見られていた律法学者やパリサイ人たちのような表面的で、見せかけだけの義ではありません。それは私たちがイエス・キリストと結ばれ、この方のいのちが注がれることによって、私たちのうちに新しく生み出されて来る義のことです。単にこの世が賞賛するような義ではなく、神のご性質を反映する義のことです。地上にある間、それは絶えず不完全ですが、私たちは神の国に見合う義、

神の国と一致する義を個人の生活においても社会においても求めるのです。

このように生きる人に対する神の素晴らしい約束が 33 節後半にあります。「そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」 「これらのもの」とは何でしょうか。これは前の 32 節の「これらのものはすべて、異邦人が切に求めているものです。あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。」という言葉を受けています。そしてその「これらのもの」とはさらに前の節の、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかということ、すなわち食べ物、飲み物、着物といった、私たちの生活に関することを指します。つまり私たちが神のことを第一に求めて歩むなら、これらのものはすべて神が私たちに与えてくださる。だから私たちはこのことについて心配する必要はない。第一にすべきことを第一にするなら、それ以外のものは神がきちんと私たちに与えてくださると言われています。

この原則に従って神の祝福にあずかった人の例としてソロモンをあげることができます。ダビデの次の王として、王になったばかりのソロモンに対して、主は I 列王記 3 章 5 節でこう問われました。「あなたに何を与えようか。願え。」 それに対してソロモンが願ったことが 9 節に記されています。すなわち「善悪を判断してあなたの民をさばくために、聞き分ける心をしもべに与えてください」と。彼はここで自分のために知恵を願ったのではなく、神から与えられた王の務めを正しく果たして、神の栄光により良く仕えるための知恵を求めたのです。言い換えれば彼は神の国と神の義が益々拡大することを求めた。この願いは神に非常に喜ばれました。神は 11 節以降で言われます。「あなたがこのことを願い、自分のために長寿を願わず、自分のために富を願わず、あなたの敵のいのちさえ願わず、むしろ、自分のために正しい訴えを聞き分ける判断力を願ったので、見よ、わたしはあなたが言ったとおりにする。見よ。わたしはあなたに、知恵と判断の心を与える。」 そしてそれに加えて与えられるもののことが 13 節でこう言われています。「そのうえ、あなたが願わなかったもの、富と誉れもあなたに与える。あなたが生きていくかぎり、王たちの中であなたに並ぶ者は一人もいない。」 第一に神の国と神の義を求める者には、神は確かにこのようにしてくださるのです。

私たちにとって今日の御言葉はどうでしょうか。私自身のことを振り返っても、聖書の中には沢山の励ましを受けた御言葉がありますが、その中でも一番力になった御言葉

はどれだろうかと思うと、このマタイ6章33節ではないかと思うことがよくあります。それほど私にとって助けとなった御言葉です。私も色々心配になることがありました。夜中に目を覚まして、ああでもない、こうでもないと思い巡らしてなかなか眠れない時がありました。「心配」という言葉は「心」と「分割する」という言葉が組み合わせられてできています。つまり心が色々な思いに分割され、まとまっていないので、不安定になり、落ち着かなくなる。そんな状況で、この御言葉は色々考えて心がバラバラに分かれて過ごすのではなく、一つのことに集中すれば良いのだと教えてくれます。まず神の国とその義とを求めれば良い。優先順位を間違えないで、これさえ求めて行けば良い。そうすればあとは神がご自身の最善のご計画に従って必ず良いように導いてくださる。そのように捉えた時、心が一つに統一され、騒ぎ立っていた心は静められ、不思議な平安へとしばしば導かれました。この先どのようにして先ほどまで心配していたことが解決するのは全く見えていないけれども、私としては神の国と神の義に思いを集中して求めて行けば、神があとのことは導いてくださる。そして神は確かにその約束の通りに、ここまで真実に守り導いてくださいました。私より信仰歴の長い先輩クリスチャン方は、もっともっとそのような体験と証しをお持ちのことでしょう。

私たちはこの素晴らしい約束をもう一度しっかり握って生きて行きたいと思います。心配事で心が一杯になりそうな時、私たちとしては一つのことに心と体を集中すれば良い。「求めなさい」という言葉は現在時制で語られていますから、いつも、絶えず、求め続けなさいという意味です。ここに心配を克服する道があります。私たちの神への感謝と信頼を、この御言葉に従う歩みに現わしたいと思います。全能者の知恵と恵みの御力に信頼して、このことこそを第一に求め続ける歩みへと。その時、神は私たちの思いを超える仕方で私たちを導き、ご自身の真実を示してくださいます。「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」